

幕末明治の写真師列伝 第六十七回 内田九一 その三十二

大正10年(1921)6月、ポートレート写真の芸術化を基本とした営業写真の技術向上を目的として、光栄倶楽部が発足し、内田邦三もこの倶楽部の発会当初の会員として、写真技術の研究に努めた。同年(1921)2月21日、内田邦三の長男、正が生まれる。大正15年(1926)2月1日、内田邦三の次男、弘男が生まれる。昭和3年(1928)10月24日、内田邦三の三男、邦典が生まれる。その後、内田邦三は、昭和4年(1929)には弱冠36歳で、大阪写真師協会副会長就任(第9代会長・結城真之輔)、昭和6年(1931)には大阪写真師協会第10代会長に就任している。昭和7年(1932)、陸軍特別大演習が大和・河内平野で挙行され、昭和天皇が大阪府に行幸されることになった。その際に陸軍特別大演習謹写班(15名)が編成されて、大阪府知事より命を受けて、内田邦三は謹写班の筆頭として昭和天皇の撮影を行うこととなった。このことから内田邦三が当時の大阪写真業界でナンバーワンの存在であったことがうかがわれる。

内田邦三については佐々木豊明編『大阪写真百年史 大阪写真師協会創立七十年誌』(大阪府写真師協会事務局発行、1972年)所収の、円量千造「内田邦三論」に詳細が書かれているが、それによれば「氏は日常世事百般に明るく且つ情誼に厚い事は驚くばかりである。時にはその情誼を重んじ過ぎて思わぬ厄災をみすみす招く事があるという話であるが、此の点はよく調整されん事を内田氏の為に希望して止まない。氏は若年より斗酒なお辞せずと言う酒豪で、酒による珍談奇話は限りなくある。」という人であったようだ。邦三の飲み友達の1人、近藤鎌三によれば、同じく飲み友達で仲の良かった佐々木豊と邦三の3人で、深夜の北の新地を酒に酔ってふらふらと歩いていると警官に職務質問されて、この警官ともめて非常に困ったこともあったという。また、邦三の趣味も多彩で、囲碁、浄瑠璃、長唄、歌謡、スポーツも剣道、テニスは学生時代にチャンピオンであった。

昭和20年(1945)、第二次世界大戦が終わる。大阪市内は空襲のため焼土と化していたが、幸いなことに内田写真館は若干の被害で済み、戦後、いち早く営業を再開することができた。そのため戦後の復員者の結婚ブームもあって、大阪天満宮での結婚記念撮影の仕事は多忙となり、戦後のベビーブーム、お宮参り、七五三の記念写真と大阪天満宮のお陰もあって、内田写真の経営も安定して順調に再成長することができた。

昭和22年(1947)は、内田家にとっておめでたいことの多い年であった。同年(1947)5月18日、内田邦三の長男、正が、北川亀太郎、きよの長女(北川勇の妹)、喜美子と結婚。さらに同年(1947)8月26日、内田邦三の二男、弘男が浅西榮三、ハルの五女、満子と結婚して、同年(1947)11月8日には、内田弘男の長男、昌彦が生まれている。

昭和23年(1948)5月12日、内田邦三の長女、ひさ子が亡くなる。法名は釈尼恵尚。ひさ子の墓は大阪内田家の菩提寺藤井寺にある。

昭和27年(1952)、「内田写真」は組織を個人商店から法人とし、「有限会社内田写真館」となり、邦三は代表取締役に就任した。邦三とその妻、千代(平塚広吉の娘)の間には、ひさ子、貴久、己代子、正、弘男、邦典の6人の子供がいたが、長男の正は大正10年(1921)に生まれ、関西大学を卒業すると、昭和18年(1943)第三期一般兵科予備学生として海軍に入隊する。昭和

22年(1947)、セレバス島より復員後、大阪市天王寺区で計理士・税理士事務所を開業し、次男の弘男も東京でのサラリーマン生活を経てこの兄の計理事務所に勤めていた。

ちょうどその頃、昭和27年(1952)10月7日、長男の正が享年32歳で急逝してしまった。法名は顕信院秋光日正居士。正の墓は大阪内田家の菩提寺藤井寺にある。そのため、次男の弘男は、自分の卒業した関西大学の先輩を頼って、二見公認会計士事務所に転職することになる。三男の邦典は立命館大学を卒業後、「有限会社銀の星写真」の岸本光男の元で写真館の修業して、その後「有限会社内田写真館」に戻ると邦三の手伝いをして働いていた。そのため邦三は、三男の邦典に「有限会社内田写真館」の後継者にしようと考えていた。ところが昭和29年(1954)7月14日、邦典は肺の病で手術をすることになってしまった。次男の弘男は、邦典と手術室に入る前に手洗いで用を足しながら、「いやなら手術は止めたらどうか」と弟に言うと、邦典は「手術さえしたら良くなるのだから」と答えて、それから手術室に入ってしまったという。しかし不幸なことに、邦典は手術中に起きたショックで死んでしまう。享年27歳であった。法名は本壽院孝徳日典信士。邦典の墓は大阪内田家の菩提寺藤井寺にある。このため、父の友人たちの説得もあって、次男の弘男は洪々と「有限会社内田写真館」の経営を引き継ぐことになってしまった。

こうして昭和30年(1955)、内田弘男は父の「有限会社内田写真館」の取締役役に就任する。しかし、写真のイロハも知らなかった弘男は、職人気質の強い古くからの従業員に疎まれて、そのため父、邦三と一緒に仕事をするのを避けることにして、同年(1955)5月、新たに豊中市服部の服部駅前(豊中市服部豊町一丁目一番一号)に独立して店舗を設けることにし、父の援助で自宅前の庭を壊してそこに1階はカメラ店、2階はスタジオとし、家の裏にあった物置を改造して暗室とした。これが「内田スタジオ」(後のウチダ・フォト・サプライ株式会社)である。

昭和32年(1957)、内田弘男は「有限会社内田写真館」の代表取締役役に就任し、内田写真の五代目、内田弘男となる。豊中にある「内田スタジオ」を本店として、父の天満の写真館を大阪営業所とする。昭和35年(1960)、邦三の長年の社会事業奉仕が褒章されて、時の内閣総理大臣池田隼人より紺綬褒章を受章した。昭和40年(1965)、邦三は、再び内閣総理大臣佐藤栄作より紺綬褒章を受章する。この頃から徐々に写真は白黒写真からカラー写真に変化してゆく。

昭和44年(1969)夏、天神祭も終わった頃に、邦三は大阪回生病院に入院することとなった。病名は肝臓がんである。昭和44年(1969)12月26日、後事を弘男に託して、邦三は享年77歳で病死する。葬儀は大阪府写真師協会葬にて執り行われた。法名は真浄院護山日邦居士。邦三の墓は大阪内田家の菩提寺藤井寺にある。

昭和46年(1971)3月、弘男はそれまでの「有限会社内田写真館」の社号を「有限会社内田写真」に変更し、息子の昌彦を取締役に就任させる。また、同年6月には資本金1500万円にて「株式会社ウチダ」を設立し、弘男は代表取締役に就任した。それと同時に3階建ての本社ビルを新築する。

(森重和雄)